

「児童生徒の心のサポート 緊急対応の手引き」の活用

～小さなサインを見逃さないために～

指導 2 課

はじめに

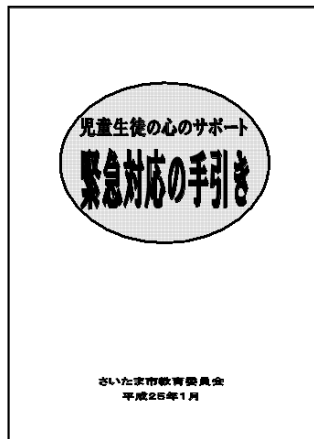
本市では、平成25年1月に「児童生徒の心のサポート 緊急対応の手引き」を市立全小・中・高等・特別支援学校に配付した。

本手引きは、児童生徒一人ひとりの心の状態を適切に把握し、緊急度に応じた迅速かつ、きめ細かな対応策を講じ、事故を未然に防ぐことをねらいとしている。

本手引きの特徴として、次の3つが挙げられる。

- ①教職員一人ひとりの危機意識を高めること
- ②支援体制を整えること
- ③対応についてマニュアル化を図ること

本手引きに従い、全教職員が組織的に対応することが重要である。



1 手引きの内容

- (1) 自殺の危険因子
- (2) 児童生徒の心のサポート緊急対応
- (3) 自殺予防のための知識・対応の留意点
- (4) 資料
 - ・対応チェックシート
 - ・ケース会議シート
 - ・保護者用資料

・関係機関一覧

(1) では、自殺の危険因子を挙げた。危険因子が多く当てはまる児童生徒は、潜在的に自殺の危険が高まる可能性があることを記している。

(2) では、緊急度別の対応の流れを記している。

緊急度1は、「普段と少し違う様子が見られる」等としている。具体的には、少し表情が暗く不安な様子が見られる、うつむきがちで視線を合わせようとしめないなどである。この緊急度1の早い段階で気づき、対応することがとても重要である。また、状況によっては、緊急度2または3の対応が必要となる場合もあり、慎重な見極め及び見守りが必要となる。

緊急度2は、「普段と違う気になる言動が見られる」等としている。具体的には、不眠や食欲不振、自傷行為が見られる、死についての発言や文章・絵での表現が見られるなどである。状況に応じて、教育相談室から臨床心理士を派遣するなど、学校と教育委員会が連携しながら対応する。

緊急度3は、「自殺未遂、あるいは企図がある」としている。具体的には、自殺の手段、日時を決めている、ロープ等の道具を用意しているなどである。緊急度3は、学校と教育委員会による合同危機対応チーム会議を開き、連携・協力して対応する。

このように、心の状態を3段階に明確に区別できるものではないが、全教職員が高い意識をもち、日頃の何気ない表情や言動、アンケートの結果等から、児童生徒の心の状態を適切に把握することが重要となる。

2 校内体制の確立

緊急時、迅速かつ的確に対応するためには、通常から教育相談体制を確立しておくことが必須である。

＜校内体制のポイント＞

- ①チェックリスト等を活用した、全教職員による見守りの徹底
 - ②一人ひとり表情を確認しながらの呼名による朝の健康観察の徹底
 - ③学校生活のあらゆる場面をとおした観察、声掛けの徹底
 - ④教職員間の報告・連絡・相談・確認の徹底
 - ⑤校長を中心とした緊急時の機動体制の確立
 - ⑥スクールカウンセラーやさわやか相談員、学校医との連携の強化
 - ⑦関係機関との積極的な連携
 - ⑧事例研修会の実施による対応力の向上
- 特に重要なことは、「報告・連絡・相談・確認」が円滑に行われることである。組織的な対応をするためには、教職員が児童生徒の変化に気付いた際、速やかに管理職に報告をするとともに、情報を共有し、「誰が・誰に・いつ・どこで・何をするか」等の役割を明確にすることが肝心である。また、登下校や夜間・休日の見守りについても配慮が必要となり、家庭との連携が不可欠である。さらに、児童相談所やこころの健康センター等、関係機関との積極的な連携を図り、支援体制を強化することも大切である。学校は、この視点を基に、自校の支援体制を常に見直していかなくてはならない。

3 TALKの原則

緊急度にかかわらず、心配な状況を察知した場合は、最も効果があると考えられる教職員等が、早急に本人と面談する必要がある。

面談をする際は、他人の目を気にせず、落ち着いて話ができるなどのふさわしい場所を選び、相手の気持ちに寄り添いながら、十分な時間をとって話を聴くことが基本となる。相談にのる者としての心得としては、「TALKの原則」を忘れてはならない。

T e l l : 言葉に出して心配していることを伝える。

A s k : 「死にたい」という気持ちについて、率直に尋ねる。

L i s t e n
: 絶望的な気持ちを傾聴する。

K e e p s a f e
: 安全を確保する。

「死にたい」という気持ちについて、率直に尋ねることを不安に感じる声もあるが、率直で、誠実な態度で話すならば、そのことで自殺の危険を引き起こすことはない。児童生徒が心を開いて話ができるよう、日頃から信頼関係を確立しておくことが大切である。

4 おわりに

自殺が現実起きてしまう前に、子どもたちは必ず「助けて！」という必死の叫びを発している。学校で毎日のように子どもと接している教職員こそが、この叫びを最初に受け止めるゲートキーパーでもある。

大事なことは、子どもたちに「希望」を育むことである。どの子どもも、前向きに一生懸命生きようとしている。しかし、時には「私なんかいないほうがいい」「生きていてもしかたがない」などと考え、自己否定的、悲観的になってしまうことがある。そんな時、大人が寄り添い、支えることがとても重要である。

「児童生徒の心のサポート 緊急対応の手引き」を活用し、学校の支援体制の強化を図ることが早急に求められる。